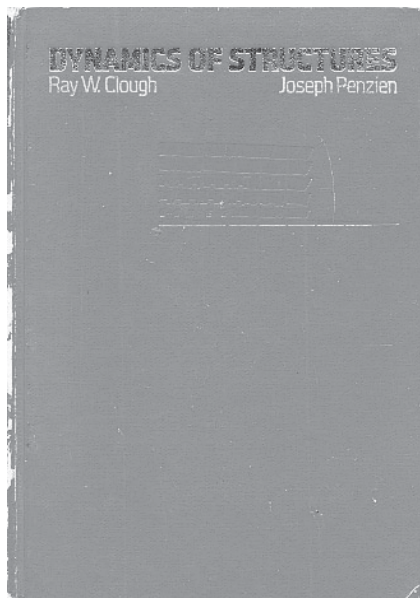


会員フォーラム

名誉会員

ジョセフ・ペンツェン(Joseph Penzien)先生
逝去



(初版の表紙、中島正愛蔵書から)

ジョセフ・ペンツェン先生のご逝去を悼む

米国カリフォルニア大学バークレー校名誉教授、本会名誉会員(1986年推挙)のジョセフ・ペンツェン先生は、2011年9月19日、カリフォルニア州レッドフォード市にあるカイザー病院で、86歳の生涯を閉じられました。“Earthquake Engineering”(耐震工学)の黎明期から現在に至るまでの発展を主導いただいた巨人が、また一人あの世へと旅立たれました。

1924年にサウスダコタ州でお生まれのペンツェン先生は、マサチューセッツ工科大学で修士号と博士号を修められた後、1953年から1988年の35年間にわたって、カリフォルニア大学バークレー校の土木工学科の教員をお務めになりました。その間一貫して、“Structural Dynamics”(構造動力学)と“Earthquake Engineering”(耐震工学)に関わる教育と研究の創生と発展にご尽力いただきました。ペンツェン先生が学生の教育用にと同僚のクロフ(Ray Clough)先生とともに著された“Dynamics of Structures”(初版は1975年に発行)は、耐震工学教科書のバイブルとして米国はもとより世界中で何十年にもわたって使われてきました。また、先生は常に視野の広い研究をめざされ、その先駆的研究は、地震動特性の評価、建築構造物の非線形応答、構造物-地盤連成系、構造物の確率論的地震応答、トンネル、オフショアプラットフォーム、橋梁の耐震設計に及び、これらの研究分野において珠玉の論文群を著されるとともに、多くのお弟子さんを育てられました。

また、ペンツェン先生は、バークレー校に設立された“Earthquake Engineering Research Center (EERC)”の初代所長をお務めになり、1970年代以降、耐震工学における実験的研究のメッカとなったバークレー振動台(1972年に完成)の導入とその後の充実を指導されました。また、これら一連のご業績によって、“Earthquake Engineering Research Institute (EERI)”(米国地震工学会)が提供する最高の名誉賞である“George W. Housner Medal”を1993年に、また“EERI Distinguished Lecturer”を2000年に受けておられます。さらに、2008年に開催された第14回世界地震工学会議において表彰された「地震工学における10名の巨人(Legends)」のお一人にも選ばれました。

ペンツェン先生をわが国で語るときに忘れられないのは、1970年代に始まった耐震工学に関する日米共同研究です。ペンツェン先生と当時東京大学教授でおられた故梅村魁先生のお二人は、それぞれ米国側と日本側の代表として当時の日米の俊英研究者を集約され、協働して取り組むべき研究課題を設定したうえで、特に大型耐震構造実験を基軸にした共同研究を長年にわたって主導されました。1980年代初めから、当時の建設省建築研究所で実施された、実大7階建て鉄筋コンクリート建物、実大6階建て鉄骨建物、実大5階建て組積造建物等の大規模実験は、耐震工学における国際共同研究の華として世界中に知れ渡るとともに、そこからは数多くの論文と幾多の日米研究者交流と友情が育まれました。とりわけ、日米研究者の交流と友情は、数十年を経た今に至るまで脈々と引き継がれ、後続する日米共同研究の礎をなしています。

世界の耐震工学の発展と日米研究者交流に多大な貢献をいただいたジョセフ・ペンツェン先生に心から感謝しつつ、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げるものです。

なお、ペンツェン先生の生い立ちやご業績については、2004年にEERIから出版された“EERI Oral History”に詳しく記されています(<http://www.eeri.org/site/images/projects/oralhistory/penzien.pdf>)。

中島正愛

(本会構造委員会 委員長、京都大学防災研究所教授)

Stephan A. Mahin

(米国太平洋地震工学研究センター センター長、
カリフォルニア大学バークレー校教授)